No.38 2024.1

放射線リスクコミュニケーション

相談員支援センターだより

専門家派遣、研修会の例

広域避難者支援連絡会 in 東京 相談窓口の設置、研修会

相談窓口の様子

放射線リスコミセンターでは、今年度、広域避難者支援連絡会 in 東京（以下、東京連絡会）が主催するイベントへの放射線に関する相談窓口の設置や研修会の開催を通じて、福島県外に避難されている方、東京都で避難者支援を行っている方々への支援を行いました。

【避難者と支援者によるふれあいフェスティバル】

「避難者と支援者によるふれあいフェスティバル」は、東日本大震災により東京都へ避難されている方同士の繋がりや避難者と支援者の繋がりを作ることを目的として、東京連絡会が平成 27 年より継続的に開催している交流イベントです。

コロナ禍を経て、約３年ぶりの開催となった 11 月３日の会場には約 150 名の方が来場し、久しぶりの再会を懐かしみながら、落語や笑いヨガ、フラダンスや歌等のステージを楽しむ来場者の様子が窺えました。

放射線リスコミセンターの相談窓口では、専門家の松原昌平先生（原子力安全研究協会）が来場者からの相談への回答と併せて、１月 23 日開催予定の福島第一原子力発電所の見学会（参加対象:大熊町、富岡町、双葉町、浪江町から町外へ避難されている方）の募集案内、個人被ばく、内部被ばく検査に関する情報提供を行いました。

来場者からは、「当時福島県に在住し、個人で線量を測定したら異常に高く、避難・移転の必要性と不安を感じたが、話を聞いてくれるところがなく、悔しい思いをした」、「ALPS 処理水にはトリチウム以外にも 60 種類以上の放射性物質が含まれているとニュースで見た」、「知り合いの住んでいる浪江町の線量が気になる」等、福島第一原子力発電所事故当時を振り返る内容のお話や、故郷の現在を気に掛ける声等が聞かれました。

【放射線に関する勉強会】

続く 11 月９日、東京連絡会からの要望により、県外避難者の支援を行っている団体の代表者等を対象に、放射線に関する基礎知識や暮らしの中の放射線について理解を深めることを目的とした研修会を開催しました。

講義「福島での暮らしと放射線」では、原子力安全研究協会の峯村明彦先生が講師を務め、福島第一原子力発電所の事故の概要、放射線に関する基礎知

識、事故後の空間線量率の推移等について説明した後、支援者を対象に作られた冊子「暮らしの手引き」より、福島で野菜を自家栽培しても大丈夫なのか、また、避難元の家財は使うことができるのか等、福島での暮らしに即した情報を紹介しました。

講義の様子

受講者からは、「事故当時、避難の必要性はあったのか。また、解除された地域の除染されていない林や雨どいの下等、線量が高くなっているホットスポットはまだあると思うが、子どもが遊んだりするときに気をつけた方が良いのか」、「福島県中通りに住んでいる母親から、周りの人がどう思っているか分からないから自分も気持ちを言えないといった話を聞いている。最初から何を恐れるべきなのか、はっきりと分かっていれば良かったのではないかと思う」という意見や、「何がリスクで何がリスクではないのか、その両方をきちんと説明してもらう必要があると思う」等の意見がありました。また、「放射線とはどういうものなのか、健康被害等のリスクについて科学的根拠に基づいた説明をいただいて参考になった」との感想がありました。

放射線リスコミセンターでは、今後も避難者のみなさんの交流会における相談窓口の設置や支援者のみなさんを対象とした勉強会の場づくりを通して、避難されている方、避難者の支援をされている方への支援を続けてまいります。ぜひご活用ください。

住民セミナーの例

福島県立二本松実業高等学校 放射線教育

令和５年 10 月 24 日、福島県立二本松実業高等学校にて、１年生 111 名を対象に放射線教育を実施しました。

二本松工業高等学校と安達東高等学校が統合され、今年度開校した二本松実業高等学校では、「総合的な探究の時間」を利用し、福島県民として地域の現状や放射線について理解を深め、正しい情報を自ら発信できるようになることを目的に、放射線教育に取り組んでいます。

講義の様子

当日は、福島県立医科大学の坪倉正治先生が講師を務め、「暮らしの放射線 自分で説明ができるために」と題した講義の後、質疑応答を行いました。

はじめに福島第一原子力発電所の事故直後の様子を振り返りながら、放射線の基礎として身近な放射線や健康影響について説明しました。次に、東京都民を対象に実施した次世代以降への健康影響に関するアンケート結果に注目し、福島県外では放射線の遺伝的影響に対して誤解している人の割合が多いこと、また、その誤解を解消するためには、自分たちが放射線に対して正しい知識を学び、発信していく

ことが必要であるということについてお話がありました。

質疑応答では、教員より「自然放射線と原発事故由来の放射線とでは人体への影響に違いはあるのか」という質問に対し、「違いはなく、同じであり、人体への影響は量の問題である。ただ、科学的には全く同じではあるものの、感覚として原発事故由来の放射線は危険であると感じる方が多くいる」という回答がありました。また、「内部被ばくと外部被ばくの説明をお願いしたい」という質問に対しては、「レントゲン検査のように体の外から放射線を受けることを外部被ばく、放射性物質を体の中に取り込んで体内から放射線を受けることを内部被ばくという。体が放射線を受けるという点では同じであり、どちらも量が重要である」との回答がありました。生徒からは、「自分の中にあったモヤモヤしたものが、一つなくなった」、「放射線を浴びたからといって必ずしも病気にかかるという事はないということを知り、福島県外に行った先で放射線のことで間違ったことを言われた際には、正しい知識を伝えたいと思った」等の感想が寄せられました。

今回の授業で学んだことを、身近な友人や家族と共有し、将来進学や就職等で福島県外の人と出会った際に正しく伝えられるよう、役立てていただけたらと思います。

専門家派遣の例

復興なみえ町十日市祭 相談窓口の設置

「復興なみえ町十日市祭」（以下、十日市祭）は、収穫を終えた町民が豊年を祝い、冬に向けた生活用品の支度をするための市として始まった、浪江町を代表する秋の伝統行事です。旧暦の 10 月 10 日を中日として３日間行われたことに由来し、「十日市祭」の名で親しまれています。

福島第一原子力発電所の事故前までは、町の大通りに約 300 の露店が出店するほどの大きなお祭りでしたが、事故後は、浪江町役場の移転先である二本松市において開催され、平成 29 年の町の一部避難指示解除に合わせて、十日市祭も浪江町に戻ってきました。

最近では、昨年、12 年ぶりに「子ども神輿」が復活し、子どもたちが神輿を元気に担ぐ姿を見ることができるようになり、大堀相馬焼の展示即売会「大せとまつり」も同時開催されるなど、大きな盛り上がりを見せています。

浪江町健康保険課では、十日市祭において、毎年内部被ばく測定検査（環境省：福島県内における住民の個人被ばく線量把握事業（内部被ばく））が実施されています。今年度は内部被ばく検査と併せて来場者の放射線に関する不安や疑問、質問に対応してもらいたいとの浪江町健康保険課の要望により、11 月 18 日、19 日の二日間、放射線リスコミセンターが会場内に相談窓口を設置し、内部被ばく検査と併せた相談対応を行いました。

相談窓口の様子

放射線リスコミセンターでは地域のイベントへの専門家派遣などを通して、放射線に関する不安や疑問に寄り添う取り組みを行っています。相談窓口を見かけた際には、ぜひお立ち寄りください。

車座意見交換会の例

飯舘村宮内地区
車座意見交換会

飯舘村宮内地区では、地区の女性が中心となり、平成 31 年度より継続的に放射線の勉強会を実施しています。令和５年度は、中間貯蔵施設及び福島第一原子力発電所の見学を実施し、12 月 12 日には、農業をテーマに車座意見交換会を開催しました。

講義では、福島大学の二瓶直登先生を講師に迎え、放射線の基礎知識を振り返りながら、セシウムの特性として、一度土に吸着すると離れにくくなること、セシウムとカリウムが似た性質を持つことから、農地にカリウムを施肥することで農作物へのセシウムの吸収を抑制することができること等について学びました。

講義の様子

当日は、宮内地区の住民と共に、いいたて移住サポートセンター職員、村に移住した花卉農家らが参加し、終始和やかな雰囲気の中、意見交換が行われました。参加者からの質問の中には、「飯舘村で自家栽培野菜を作っているが、震災前より野菜の味が苦いと感じる」という内容もあり、講師からは、「除染により畑の有機物が少なくなったと想像する。重要なミネラル成分を補うため化学肥料を入れると硝酸が多くなるため、それが苦みの原因であると思われる」と回答がありました。また、「飯舘村で採れた農産物と他の地域で採れたものでは、放射能濃度に違いがあるのか」という質問には、「畑で栽培するものは対策がきちんとされているので変わらないが、震災前からある果樹等から収穫される果実に含まれる放射能濃度は少し違う可能性もある」との回答がありました。

継続的に放射線の話題に触れる機会を持ち続けることにより、放射線に対する理解が深まり、勉強会に参加した方の中には、放射線に対する不安が少しずつ解消され、自家野菜の栽培を再開し、自分で作った野菜を子や孫に自信を持っておすそ分けできるようになったという前向きな意見が聞かれるようになりました。

講義後の質疑応答の様子

帰村されたみなさんのふるさとでの暮らしが充実したものとなるよう、放射線リスコミセンターとして、今後も継続的に支援していきたいと思います。

放射線リスクコミュニケーション相談員支援センターだより №38
発行：**放射線リスクコミュニケーション相談員支援センター**

連絡先：〒970-8026 いわき市平字小太郎町１－６
いわきセンタービル5階
フリーダイヤル：0120-478-100
FAX：0246-35-5158
E -mail：F-sodan@nsra.or.jp

本だよりは、環境省の令和５年度放射線健康管理・健康不安対策事業（福島県内における放射線に係る健康影響等に関するリスクコミュニケーション事業）に基づき、作成しています。